

[掲載紙] 読売新聞「先読み深読み」

[掲載日] 2013年4月4日

[テーマ] ボーダーレス プラス思考で

先月、秋間と榛名の梅林を訪れた。まだ寒気が残っていたので、紅梅がポツポツ咲き始めた頃だった。両梅林は安中市、高崎市と異なる都市に属するが、達観すれば県内のほぼ同じ地域にある。

都道府県や市町村という地域の区分は、地方自治制度のもとで定められた行政区画だ。地域区分の歴史は古く、上毛かるたの「昔を語る多胡の古碑」で有名な多胡碑は、8世紀に秋間・榛名梅林に近い地域に建てられた多胡郡の建郡碑と言われる。ただ、地域の名称や範囲は、時代とともに移り変わる。群馬県は、明治の廃藩置県によって誕生し、その後入間県と合併していったん熊谷県となったが、県域の再調整によって再び群馬県として独立し、現在に至っている。県内の市町村は、平成の大合併などを通じて集約が進み、みどり市やみなかみ町のように名称を変えた自治体もある。

企業や人々の動きは、行政よりも一層自由で活発だ。成長企業の多くは、地域や国をまたいで生産・販売拠点を展開し、時に本拠地さえも移すなど、ボーダーレスを前提に活動している。インターネットなど情報関連技術の普及や鉄道・道路網の整備なども、こうした動きを一層加速する。また、雇用機会やビジネスチャンスを求めようとする人々は、地域の枠に収まらず、国内外を幅広く動き回る。

県内で生まれ、県外へ移り住んで活躍した企業家は少なくない。昨秋、横浜開港資料館で横浜の企業家に関する特別展示を拝観したところ、横浜最大の生糸商人・茂木惣兵衛（高崎出身）や不動産事業を通じて横浜港湾の発展に貢献した伏島近蔵（藪塚出身）などは、明治期に横浜で活躍した県内出身者だった。

社会のグローバル化が進む中で、地域や国境を越える企業や人々の動きは今後ますます活発になるだろう。ただ、企業や人材の流出ばかりが進むと、地域は衰退の一途を辿りかねない。県内は、幸い自然災害の少なさや都心への近さという魅力もあって、県外企業の工場立地が盛んだ。一方、県民については、11年連続で県外への流出が流入を上回っている。地域活性化のためには、県内人材の活用や、他県の人材を呼び込む努力が必要だろう。県外へ飛び出し活躍する県内出身者の意見が、案外そのヒントになるかもしれない。

先月は下旬にかけて予想外に気温が上がり、時季が異なるはずの梅と桜の開花をほぼ同時に楽しめた。ボーダーレス時代も、そう悪いことばかりではない。

◆ 県人口と県外流出入（人）

	人口増減（前年比）	県外への流出	県外からの流入
2000年	21,312	46,195	49,397
10年	▲16,067	40,459	36,411
12年	▲8,444	40,043	37,373

「平成24年 県移動人口調査結果」より（県内移動分を除く）

▲は減少数

（ 日本銀行前橋支店長  
相良 雅幸 ）